

俳句月評

佐久間敏高

「稲」 一月創刊号

昭和五十九年、鍵和田柚子が創刊した「未来図」が本年一月に終刊。その終刊を受けて「稲」準備号を経て、創刊の運びとなった。隔月刊である。

主宰山田真砂年、現段階では同人会長、編集長は決まっていない。

山田主宰は「『未来図』の終刊により自然発生的に集まった皆様と『未来図』以外から参加いただいた皆様により『稲俳句会』が立ち上がりました。」と巻頭で述べている。「気取らず、背のびをせず、自分の言葉で自分の詩を詠むこと」をモットーとする。

目次の次頁から六頁にわたって伊藤トキノ、星野高士ら六名の著名俳人による「祝句」が三句づつ掲載され、次頁に主宰の「第一声」十二句。同人等の作品として「垂穂集」「瑞穂集」「稲穂集」が続ぎ、選評エッセー、吟行録等バランス良く編集されている。

主宰作品「第一声」より

日照雨過ぎ島に匂へる葛の花
虫の音のコップあふるるやうにかな
曙は海より来たり注連飾

山田真砂年

「垂穂集」より

名月や切絵のやうな闇に泛く
馳せ参ず真つ直ぐな先稲穂波
胡桃落つ夜は思慮深き髪の先
書き込みの多き歳時記冬隣り

今村博子

岩本尚子

北原昭子

直木柊子

「瑞穂集」より 山田真砂年選

私のころの揺れて一詩のまとまりぬ
寒卵火種のごとく手のひらに
石垣は大木戸の跡虫すだく
相撲草腰を落として引き抜けり
新玉の光り集めて「稲」創刊

西井久美子

伊藤翠

牧園 賀

大坪正美

沼田布美

「稲穂集」より 山田真砂年選

キヤツチャーミットの凹み真つ黒夏の果
結びあげし髪に稲穂や初詣
不揃ひの取れ立て野菜涼新た
雨粒の波紋の中のあめんばう
電線のだらりと撓む豊の秋

岡本秀子

高原貞夫

飛田小馬々

瀧本 萌

上田信隆

「稲」という結社名は、「日本文化の源流を辿れば、稲作に行き当たることから、稲作が日本人のもの、考え方、見方の基調となっている」ためだとしている。本「創刊号」を起点として「稲」俳句会が大きく羽撃かれることを願って止まない。